



前線俳句『砲車』（長谷川素逝）の受容：「ほととぎす」と「京大俳句」

米田， 恵子

(Citation)

日本文化論年報, 26:61-77

(Issue Date)

2023-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100481680>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481680>



前線俳句『砲車』（長谷川素逝）の受容

——「ほととぎす」と「京大俳句」——

米 田 恵 子

はじめに

新興俳句を掲げる結社では、昭和一二年七月七日の支那事変（盧溝橋事件）（注1）が起こる前から、戦争俳句が詠まれてきた。しかし、特高により昭和一五年二月「京大俳句」の主要会員が治安維持法違反により検挙されたことを皮切りに、他の新興俳句結社も弾圧を受け、社会の流れは一気に戦争体制へと突入していった。戦争俳句は、戦争を詠んだ俳句であるが、そのなかに戦闘俳句・戦場俳句・前線俳句と言われる実際に従軍した兵士が戦場で詠んだ俳句と、戦場には行かず戦場を想像して詠んだ俳句に分けられる。この名称については定まったものはないが、本稿では、前者を前線俳句、後者を戦火想像俳句と呼ぶ（注2）。そのなかで、実際に従軍して詠まれた俳句を編んだ句集が長谷川素逝の『砲車』である。本稿では、前線俳句集である『砲車』をめくって、当時の一大勢力であった「ホトトギス」とそ

れに対置する新興俳句の結社の一つである「京大俳句」を見ていくことによって、戦争俳句のうちの前線俳句の受容について考察する。

1. 「ホトトギス」と戦争俳句

長谷川素逝（本名直次郎、明治四〇―昭和二一年）は四〇歳の短命である。郷里は三重県津市であり、第三高等学校を経て京都帝国大学文学部を卒業し、甲南高等学校の教授を務めた。俳句は、昭和二年ごろ、京大三高俳句会より始め、田中王城、鈴鹿野風呂の指導を受け、「京鹿子」「ホトトギス」に投句する。昭和八年一月の「京大俳句」の創刊にも関わるが、昭和一一年の春、無季俳句容認の「京大俳句」から離れ、以後「ホトトギス」を中心に活動する。

昭和一二年七月七日、支那事変が起こると、長谷川素逝は程なく砲兵少尉として応召され、昭和一三年一二月、病

を得て入院、内地送還となった。その一年程の従軍期間中に中国の戦場から「ホトトギス」に投句した句をまとめたのが『砲車』であり、昭和一四年四月の刊行である。

長谷川素逝の前線俳句は選者高濱虚子の胸を打ったにちがひなく、雑詠の巻頭になったのが、昭和一三年一月号であつた。それは以下に示す四句である。

みいくさは酷寒の野をおほひ征く

友をはふり涙せし目に雁たかく

ねむれねば眞夜の焚火をとりかこむ

をのこわれいくさのには明治節

「明治節」は明治天皇の誕生日十一月三日である。これらの戦場吟はまさに前線俳句であり、この後巻頭や上位を占め注目された。このように書けば客観的であるが、巻頭や上位に選んだのは高濱虚子である。支那事変以後、俳壇では、戦争を詠んだ俳句である戦争俳句が多く詠まれるようになる。とくに、新興俳句系の結社でよく詠まれるのであるが、この新興俳句と対立する立場にある「ホトトギス」ひいては高濱虚子は、この支那事変や戦争俳句をどう受け

止めていたのだろうか。

まず、支那事変以後、「ホトトギス」に戦争俳句が正面から取り上げられたのは、昭和一二年一二月号の雑詠句評會（一四一）の川端茅舎の評である。

片かげに出征兵士や子を捧げ 白六人

兵隊さんには子供がつきものである。兵士も子も聖なる感じがする。（略）この句は兵士と子とのさういふ場面に感動したこの頃ある多くの句の中の一つである。けれどもこの句丈が特に傑出してゐると思はれない。然し烈日の片陰は一抹の淋しみ許りで易水寒しといったやうな舞臺的な悲壮さを持たぬ丈に却て小さい虔しい悲壮さが現れて素直な清さが感じられる。

今朝は、大場鎮に日章旗が上つたのを祝して兵隊さんをば此処に引っ張りだしてつたのである。（昭和一二一年一〇月二七日朝）【傍線は筆者、以下同じ】

新興俳句系の俳句誌には支那事変以前にも「出征兵士」といふやうな戦争を詠んだ俳句は掲載されていたが、「ホトトギス」ではこの「片かげに」といふ句が初めて大きく

取り上げられたと言える。川端茅舎は、兵士と子という組み合わせをどちらも「聖なる」者として捉え、的確な評をしている。この「句評會」とは前月号の主に「雑詠」に取り上げられた句について批評し合うのであるが、この句と

作者の白六人は前号の十一月号には載っていないのである。これは一二月号に掲載された「句評會」であるため、掲載されたのは十一月号ということになる。しかし、入念に調べてみたが、十一月号には白六人という名前も句もないのである。ここは推論するしかないが、「大場鎮に日章旗が上ったのを祝して」とあるので、川端茅舎が苦戦の後に戦果をあげたことへの嬉しさから、「ホトトギス」ではそれまで取り上げられなかった戦争俳句をたまたま話題に出したと推量するしかない。確かに、戦争状態にあつて戦鬨で勝利をあげることをうれしく思うのは、負けることよりも国民感情として素直な気持ちであるかもしれない。文中にある「大場鎮」は上海市にあり、そこでは激戦の末、昭和二年一〇月二七日ついに日本軍が占領し日章旗が掲げられたということである。その記事に川端茅舎は触発されて、月例の雑詠句評會に投げかけたということになる。戦争俳句に対しては慎重な態度であつた高濱虚子は、「雑

詠」に載っていない俳句を載せざるを得なかった、あるいは雑詠座談会場で話題になったことは確かであり、国民感情から言ってもこれを掲載せざるを得なかったのだと推測できる。

しかし、支那事変以後の世の中は、戦争ムード一色になりつつあり、俳壇も無関心ではいられなくなつて来ているが、「ホトトギス」が全く無関心かというとそうではなく、高濱虚子の近況や雑感が書かれた「消息」欄や虚子を交えた数名の同人たちによる「座談會」でも、支那事変については取り上げられている。

例えば、昭和二年九月号の「消息」では、「北支各地に在る讀者諸君の安否をお伺ひ申上げます。引揚げの模様が新聞紙上で報道されて居る土地に御在住の方は、この九月號は暫く發送を見合せて置いて何分の御報を待つことにしようかとも考へて居ります。殊に蒙東政府に關係の有つた方々等のご安否を懸念し其御報を一日千秋の思ひで待つて居る次第で御座います」とあり、「ホトトギス」もどうかしていられないということであろう。七月に支那事変が始まったので、九月号で早速北支の読者を氣遣う虚子である。また、蒙東政府の關係者にも氣遣いを示すところ

も、俳誌経営の戦略から言っても虚子らしさが表れているところかもしれない。

一〇月号の「消息」には、「今回の事変につきての将兵の労苦に深き敬意を表し、一日も早く戦争の目的を達成して平和の来らんことを翹望します。我が讀者諸君の中にも召に應じて戦線に赴いて居る多くの人が有るやうであり、又上海はじめ戦線に活動して居る非戦闘員たる諸君のあることも承知して居ります。其等の人の上にも神明の加護あらんことを祈ります」という文を載せる。それと同じ号の「雑詠」欄の四席には、中村草田男の戦争俳句が載る。

親雀子雀ラヂオ軍歌ばかり

戦報に暮れ夏の星あるひは月

灯蛾は夜々減れど戦報相つげり

この草田男の戦争俳句は、誓子の分類によると銃後俳句になる。草田男自身、銃後にいて、戦報が気になる様子を素直に表した俳句である。しかし、他の同人たちは、戦争俳句に關してはまるで無関心であるかのように、花鳥諷詠の俳句が掲載されている。ここにわずか三句の戦争俳句が載

るばかりである。「ホトトギス」が戦争俳句に全く無関心ではないことの現れではあるが、新興俳句の結社と比べれば、ずっと数は少ないのである。

一〇月号の「消息」では、「毎日の朝刊夕刊の新聞が来るたびに、又ラヂオのニュースの報道がある度に待ち兼ねて戦況に耳を傾けることはどなたも同じ事と思ひます。俳人諸君の中にも續々應召される方々が有るやうであります。その消息は出来るだけ紙上に傳へたいと思つて居ります」と述べ、戦況が気になる気持ちと応召された「ホトトギス」の俳人たちを氣遣う虚子の気持ちが表れている。さらに、一〇月号の「消息」で、虚子は燕の太子丹が秦の始皇帝の刺客として送った荊軻が旅立つときに詠んだ「風蕭蕭兮易水寒・壯士一去兮不復還」という詩から蕪村の「易水に根深ながるゝ寒かな」という句を作ったことを思い出し、易水というのはどんな川幅があるのかということを知りたいと思つていたが、このたび、新聞の写真で見ると騎馬が数十騎渡つているくらいの河だということが分かったという。これにより易水の印象が鮮明になって、蕪村の句を更に口ずさんでみたということを書いている。先に述べた一二月号「雑詠句評會」での句評で、川端茅舎が「易水

寒し」と言ったのは、十一月号の虚子の「消息」に基づいたものである。

ここでまた、先の川端茅舎の句評に戻るが、前号の虚子の言葉を使って、茅舎は「片かげに出征兵士や子を捧げ」という句には、「易水寒し」というような大舞台的な悲壮感ではなく、これから出征するという小さい悲壮感が出ていて素直な清さがあると述べている。確かに実際に戦っている兵士の悲壮感とは比べものにならないだろうが、出征前の生きて帰って、またこの子供を抱き上げることができるかという悲壮感は十分に読み取れる俳句になっている。

また、同じ十一月号の「座談會」では、以下のような会話が記され、ここでもよく長谷川素逝の名前が出て来る。

奈王。 支那では有史以来嚴冬の間に戦争をやつ

たことは無い、出来ないのです、それでまア冬までに片が付けばよいのですが。

風生。 何ですか俳句も少し遠慮するやうになります。俳人で出征したのは…。

虚子。 先づ長谷川素逝です、その他に出て居るものも相當あるやうです。

この対談に出て来る「奈王」は片岡奈王であり「風生」は富安風生である。このように、虚子は長谷川素逝という才能ある俳人が出征していることを認識しており、さらに同じ号には、「戦地より其他（二）」において、「（一）船中からこの手紙をしたゝめてゐます」で始まる長谷川素逝の手紙が、他の従軍俳人の手紙とともに掲載される。その手紙には、「（二）しばらくこれでお便り出来ぬと思ひます。よい句があつたら雑詠にでも御採り下されば幸と存じます、船中最後の夜記。相當の激戦が予想されます」とあり、「雨さむきテープに岸はへだたりぬ」「雨さむし日本の海とわかる、日」という出港の二句の次に「（三）これから戦ひにゆきます」と書かれている。これだけでも、戦地へ赴く兵士に深く頭の下がる思いを起こさせる。

そうして、二月号の「雑詠句評會」に、先に引用した「片かげに出征兵士や子を捧げ」についての川端茅舎の句評が掲載されるのである。同じ号には、長谷川素逝の手紙の一部も載る。

上陸以来、水と泥濘の湿地の中を急進／＼の難行軍

の百数十里でありました。時には馬上のひざのあたり
にまで水が及ぶやうな深い水の中を行かねばならぬこ
ともありました。砲車は泥の中に喰ひこんで動かなく
なることしば／＼、馬は倒れますし、しかも状況は急
を要するといふ有様、泣くに泣かれぬ気持でみんなが
一生懸命に進んで來ました。

軍歌には、一本の煙草を二人で分けてのむなんて文
句がありますが、時によると十人もが一口づ、喫ふと
いふやうなこともありました。飛行機が煙草を投げて
行つて呉れた時の嬉しさは何とも言へない程でした、
それもほんのわづかなのですが。

「水と泥濘の湿地」や「馬」が倒れるというところは、俳
句にも詠まれている光景である。また後に句集の題名とな
る「砲車」という言葉も出ている。

この一二月号の虚子の「消息」には、「北支戦線はもと
よりのこと上海の方面の戦線も極めて有利に展開したこと
を心から祝福いたします。各地に轉戦しつゝある我が俳人
諸君の健闘を祈ります」とあり、これは、出征した「ホト
トギス」関係の俳人の武運を素直に祈る気持ちであらう。

そういう長谷川素逝を励ます気持ちか、巻頭富安風生、二
席中村汀女に続き、三席に長谷川素逝の句が四句入ってい
る。これは、もちろん戦争俳句ではなく、素逝が出征前に
作り投句した俳句であると予想されるが、場所は「出征」
となっている。

はまゆふに雨しろ／＼とかつ太く 出征 長谷川素逝
掃苔の人になみ立つ高野杉
沙羅の花終りぬ山の空は秋
黍の空しだいに星をちりばめぬ

郷里三重県津への墓参の情景であらうか。「ホトトギス」
調の俳句である。ただ名前の前にある「出征」という言葉
に深い意味を感じさせる。

そして、いよいよ、昭和十三年一月号に、素逝の戦場俳
句が巻頭に選ばれるのである。次章では、長谷川素逝の前
線俳句がどのように「ホトトギス」に掲載されたかを見て
いく。

2. 『砲車』と「ホトトギス」

「ホトトギス」昭和二年一月号の雑詠巻頭を飾るのは、

みいくさは酷寒の野をおほひ征く　〇〇部隊　長谷川素逝
友をはふり涙せし目に雁たかく
ねむれねば眞夜の焚火をとりかこむ
をのこわれいくさにはの明治節

の四句である。先の長谷川素逝の手紙といい、これらの句を読むと戦争はしてはならないと改めて肝に銘じさせられる。また、「〇〇部隊」と伏字にされていることも戦争の秘密めいた怪しさを感じられるところである。

次号二月号の「雑詠句評會」では、「みいくさ」の句について、佐藤漾人と大橋櫻坡子の二人の句評が載せられている。ここによりやく従軍兵士からの前線俳句が掲載され、しかも巻頭を飾ったのである。二人の評は、褒め言葉に終始する。

佐藤漾人は、「巻頭第一の句、高邁にして気迫の籠った句である。解説は別に要せないであろう」と言いつつも「酷寒」という普通語を季語化していること、これが「気迫高

邁の裏に一種の詩としてのさみしみ」を漂わせていると述べる。確かに、「寒」というような語ではなく、「酷寒」とすることで計り知れない「さみしみ」が出ていると言える。

大橋櫻坡子は、同じ一月号の虚子の「消息欄」の「戦地の諸君からもだん／＼と立派な俳句を寄せられ又續々と身自ら銃剣を執つた通信にも接することを喜びます」を引用し、まさに、長谷川素逝の俳句はそれに相応しく、ニュース映画や戦争写真で見たというのに過ぎなかったところが、目の当たりに見たものとなり、それはこの句の表現力によるものだとし、「時局諷詠中の一品」と称すべきものだと言ふ。これらの賛美は納得できるものである。

このように、「ホトトギス」誌上では、支那事変が始まってよりやく戦争俳句が注目されるのだが、内地にいて詠む銃後俳句でもなく、戦場に行かずに前線で戦っているかのように詠む戦火想望俳句でもない、まさに従軍している俳人の前線俳句が取り上げられているのである。高濱虚子はそれを待っていたかのように巻頭に置いたと捉えるのはうがった見方であろうか。

次の二月号に掲載はなく、三月号では三席に入っている。

寒夜くらし曉けのいくさの時を待つ 南京 長谷川素逝

たんぽゝやいま江南にいくさやむ

寒風の強ければふる旗おもし

目をつむりはるばる來ぬる枯野あり

四月号は、「ホトトギス」五百号記念号であり、二席に載る。

家まれに枯野のうねり道のうねり ○○ 長谷川素逝

枯草に友の流せし血しほこれ

皮ごろも著て大人の風貌を（注3）

担がれて濃霧の中へ消えてゆく

寒夜くらし曉けのいくさの時を待つ

「家まれに」の句の「枯野のうねり道のうねり」は山口誓子の満洲で詠んだ句「ただ見る起き伏し枯野の起き伏し」を連想させる。広大な満洲を詠むには、誓子が「起き伏し」を繰り返したように、長谷川素逝も「うねり」を繰り返さざるを得なかったのだろう。

この四月号の「戦地より其他」には、長谷川素逝の手紙

が紹介されている。

としをさんのお嬢さんから片仮名の手紙をもらひ、「ハセガワサンノオヂサン、タマニアタツテハイヤデス」といふのをよんで、涙が出ます。

近く某方面に轉進とのこと、さうすれば又手紙と縁遠くなります。どこへ行くのかはわかりませんが、はり切った気持です。

澤山の應召俳人、どんな句、作つてられるでせうか。戦場での俳句、ものになつてゐるでせうか、いつも心配です。自分だけで感動しすぎてゐるのではないかと、いふことが不安です。

「としを」は、虚子の子息の高濱年尾である。幼い女の子のカタカナ書きの手紙の純粹な気持ちに感動しない者はいないであろう。また、後半の「戦場での俳句、ものになつてゐるでせうか」「自分だけ感動しすぎてゐるのではない」といふことが不安です」という文面にも、俳人としての苦悩が見える。

次の五月号は二席になり、次の四句が掲載される。

足ぶみをして暖をとるばかりなり 中島部隊 長谷川素逝

稲の山にひそめるを刀で引き出だす

酷寒とうゑとのかたきあはれまず

雪に伏し掌あはすかたきにくしと見る

一月号での「酷寒」が繰り返されるが、ここには敵兵が「かたき」として登場する。

六月号は再び巻頭を飾る。

馬ゆかず雪はおもてをたゝくなり 北支陣中 長谷川素逝

雪の上に焚くべきものもなく暮れぬ

民うゑぬ酷寒は野をおほひけり

凍る断層黄河文明起りし地

三句目の「民うゑぬ」の「酷寒は野をおほひけり」は、一月号の巻頭の句「酷寒の野をおほひ征く」の類想句かもしれないが、「酷寒が野をおおう」というイメージは、行軍の過酷さが描かれ、胸に迫るものがある。同じ六月号の「戦地より其他」においては、なんと「ホトトギス」の俳人である

ある南恵之と一緒に撮った写真も掲載される。

「大変幸福なこと」に陣中で、俳句仲間の南恵之に出会い、お互い何処へ行くのか分からないことばかりだから写真を撮ったということである。南恵之という俳人は、素逝ほど有名ではなく詳細は不明であるが、素逝と同じく従軍し前線俳句を「ホトトギス」に投句している。大柄な素逝と小柄な南恵之が写った写真が「ホトトギス」に載る。戦場で撮られた貴重な写真である。

さて、次の七月号もまた巻頭である。

山眠るかたきこもると指すは遠き 陣中 長谷川素逝

思ひあまたいくさする身のおぼろ夜は

雪の上にうつぶす敵屍銅貨散り

春聯やいくさは遠く山に去り

具体的に「かたき」が出てくる。「春聯」は赤い紙に正月を祝う縁起のいい詩文を書いたもので、家の入口や門に飾られる。

八月と九月は掲載がなく、一〇月号はまた巻頭である。

凍土ゆれ射ちし砲身あとへすざる 在青島 長谷川素逝
砲据うとかつ／＼凍てし地を掘る

たばこ欲りあまきもの欲り雨季ながし

氾濫の黄河の民の粟しづか

「たばこ欲り」の句については、次の一一月号の「雑詠句評會」に、皆吉爽雨の句評が載る。「雨季」という語から、ちようど素逝が徐州會戰前後の俳句であろうと推測し、戦場では「たばこ」も「あまきもの」にも飢えるが、「欲し」ながら與へられぬ意を『欲り』という簡勁なことばにあらはし、それをかさね用いた表現の迫力によるのである」と述べる。

このように、長谷川素逝の前線俳句は次の一一月号は八席、一二月号は六席、年が明けて昭和一四年の一月号は二席、そして二月号は巻頭を飾り、三月号は一二席、四月号は二五席となり、これが前線俳句の最後となる（注4）。

そうして、これらの「ホトトギス」に投句された前線俳句が句集としてまとめられたのが、昭和一四年四月に出版された『砲車』である。『砲車』の表現上の特徴としては、橋本鶏二や谷山花猿などがすでに指摘していることであ

り、『砲車』を一読すれば気付くことであるが、句集『砲車』の作品としての特徴にも触れておく。

まず、特徴的なことは、ひらがなが多く使われていることである。「戦い」は「いくさ」、「敵」は「かたき」というように、漢語ではなく和語が使われる。この効果は、語感を和らげる効果を持ち、戦争の冷たさや硬直性を避けたと考えられる。例えば、西東三鬼は「戦争」と題した連作俳句のシリーズでは、「機関銃熱キ蛇腹ヲ震ハスル」（「京大俳句」昭和一三年一月号）などのカタカナを使用し、あえて鋭さを表現するが、和語をしかもひらがなで表現すると、古風な雰囲気醸し一瞬戦国時代の戦いを思わせる。しかし、現実の戦争なのである。また、字余り、破調の句や口語もあり、あえて定型をはずしているように見える。戦争の悲惨さも含めて、戦争の本質を詠むには、五・七・五の定型では表せない叫びのようなものがあり、それにより実際に戦地にいるという現実性が増す。また、「山眠るかたきこもると指すは遠き」などのように一句の中に複数の動詞があり、連続した動作がいわば映画のように一句の中に展開される。

このように、表現が工夫された長谷川素逝の前線俳句

は、高濱虚子によって注目され、昭和十三年一月から昭和十四年三月の素逝が帰国するまでの一年余りの期間に五回も「雑詠」巻頭に置いたり、そうでなければ一〇席までに置くことによって俳壇に知れ渡ったと言える。こうして、同じ戦争俳句でも、戦争に行かずに戦争を読むという戦火期望俳句ではなく、戦場で詠まれた前線俳句の秀句が「ホトトギス」によって紹介されたのである。

このように、「ホトトギス」には長谷川素逝という実力のある俳人が従軍し、心にしみる前線俳句を作っているが、「ホトトギス」に対置する新興俳句の俳人たちはどう思っていたのだろうか。次に、長谷川素逝もその創刊に関わった「京大俳句」の様子を述べることにする。

3. 「京大俳句」と戦争俳句

長谷川素逝と「京大俳句」の関係は、京大三高俳句会とのつながりから、創刊会員として参加し、「俳句に於ける『季』雑感」（昭和九年九月号）と「俳句の運命——連作、無季の矛盾——」（昭和一〇年八月号）という俳句論を発表する。これらの論攷の焦点は俳句には季語が必要であるということであった。しかし、井上白文地が昭和十一年一

月号に「季の問題」を書き、無季容認の態度を示したことにより、素逝は「京大俳句」を去った。その後に従軍し、前線俳句を「ホトトギス」に投句することにより、虚子が前線俳句として巻頭に何回も取り上げ、そして句集として『砲車』が編まれた。このような経緯があり、素逝が前線俳句を作ったときには、新興俳句からは手を引いていたのであるが、素逝の句が「ホトトギス」の巻頭を飾った昭和十三年一月号の後の新興俳句の「京大俳句」の反応はどうであろうか。

まず、「京大俳句」のその反応を見る前に、「京大俳句」で戦争俳句がどのように扱われていたかを見る。

早い時期では、昭和十一年一月号に、仁智栄坊の戦争俳句が、一般読者の投句欄である「三角点」（井上白文地選）に載り、これは仁智栄坊の「京大俳句」のデビュー作でもある。

地の果に黒き兵士と血の砂字

戦艦の鋼鐵の窓より白き吐瀉

戦闘機ばらのある野に逆立ちぬ

金星とナポレオンこそ西へ行く

コンムニスト丘^{おか}上のキリスト射落としぬ

昨夜二時レーニン棺を脱出しぬ

大阪外語専門学校のロシア語学科を出ているためか、最後の二句はソ連との関連であり、戦争俳句としては三句目の「戦闘機ばらのある野に逆立ちぬ」は、新興戦争俳句としてよく例に出されるもので、現代でも「戦闘機」の句は鮮烈である。井上白文地の選評としては、仁智栄坊の句全体を社会情勢を詠み込んだ「現代インテリ層の俳句」と評するが、「戦闘機」の句については残念ながら触れていない。このように、「京大俳句」では「ホトトギス」よりも早く戦争俳句が取り上げられていたことは明らかである。その後の「京大俳句」での戦争俳句については、ちょうど平畑静塔の評論があるので引用する。それは、昭和十三年二月号の「京大俳句」が企画した「特輯 事変俳句」であり、「京大俳句」の俳人たちの俳句を紹介している。

題もつけられない

戦闘機果て、機銃演習の音がしたぞ

昭和十二年二月号 三谷昭

射撃手のふとうなだれて戦闘機

昭和十二年一〇月号 仁智栄坊

空襲來運河に鼠のみ肥り

昭和十二年一〇月号 和田邊水樓

灰皿を見つめ征くのだといふ

昭和十二年 九月号 芝昌三郎

鰯雲血は上海へつながりつ

昭和十二年一〇月号 宮崎戎人

砲音に鳥獸魚介冷え曇る

昭和十二年一〇月号 西東三鬼

軍歌さやかに少年の頭まろく暮れ

昭和十二年一二月号 波止影夫

我講義軍靴の音にたゝかれたり

昭和十二年一〇月号 井上白文地

街に出づ

戦争の話ばかりで秋ぐもり

昭和十二年一〇月号 中村三山

上海は渴す鶏頭は残照に

昭和十二年一〇月号 堀内薫

静塔は執筆の関係からか、前年の九月号から一二月号の「會員集」から秀句を挙げている。「題もつけられない」は

三谷昭の「戦闘機果て、」の連作に、同じく「街に出づ」も中村三山の「戦争の話ばかりで」の連作に付けられ題である。また、これらの俳句は、「京大俳句」における戦争俳句として必ずと言っていいほど例に挙げられる俳句である。その後が続く「開幕第一場」において、平畑静塔はそれぞの作品の鑑賞を述べる。紙幅の関係から一〇句すべてを取り上げるのは控えるが、まず、三谷昭の作品を挙げて「事変俳句の最も異色作であり、優秀作であらう」と述べる。仁智栄坊については前述の「戦闘機ばらのある野に逆立ちぬ」は「射撃手」の句に先立つこと一年前の作品として紹介されている。この「射撃手」の句は、空中戦の一場面に焦点をあてた、その鋭敏さを褒める。芝昌三郎の句も「京大俳句」の戦争俳句としてよく紹介されるものである。「人類の幸不幸、或ひは時局云々と云った底のものを打抜いて了った、いはゞ宇宙の無言」とまで褒める。井上白文地の句も有名な句であり、「最も烈しい作品」と評し、「講義と軍靴の衝撃には必然性がなく偶然があるだけ」であり、そ

れが白文地の「烈しさ」を表すと述べる。現代の読者から見ると、学問の場にも戦争の陰がしのびよる怖さが描かれている。

このように、「京大俳句」では、昭和十一年一月号の「戦闘機ばらのある野に逆立ちぬ」から始まって、戦争俳句が詠まれていく。しかし、これらはすべて戦場で詠まれた前線俳句ではなく、ニュース映画などを見て作られた戦火想望俳句である。そのためか、「京大俳句」を始めとする新興俳句の俳人たちは、前線俳句で秀でた作品がないというジレンマを感じていたようである。例えば、山口誓子は、昭和十三年二月二七日の「戦争俳句」と題した「JOBKのラジオ放送で、「前線俳句」について、今俳壇ではすぐれた前線俳句の出現が待たれると言うのである。これは、命の危険にさらされる戦場で俳句を作ることの困難さと作者自身の眼と腕という問題、平たく言えば、極限状態にある戦場を五・七・五の俳句に詠み込んでいくことができるか、実際に可能なのかということをふまえた上での発言であるが、俳壇は出征作家たちの労作を期待していると誓子は述べるのである。

ちょうどそんな時に、「ホトトギス」では、長谷川素逝

が詠んだ戦場俳句が昭和十三年一月号の雑誌巻頭に選ばれたのである。新興俳句の俳人たちは「ホトトギス」に先を越されたと、地団太を踏んだのではないかと考えるのは筆者だけであろうか。

4. 素逝の前線俳句に対する「京大俳句」の反応

「京大俳句」の俳人たちは、「ホトトギス」誌上に発表された長谷川素逝の戦場俳句をどう捉えていたのであろうか。

まず、具体的に長谷川素逝の「ホトトギス」巻頭の四句を挙げ反応を示したのは、堀内薫「事変俳句総論」(「京大俳句」昭和十三年四月号)である。素逝の前線俳句により、新興俳句だけでなく「ホトトギス」のような伝統俳句も月並み俳句からリズムに戻り、花鳥諷詠というように殻に閉じこもっていたのが解放され、伝統俳句も新興俳句も一体となって弁証法的発展が、平時よりも何倍も早く達成されるときがきたと述べる。前線俳句を掲載するという「ホトトギス」の英断を素直に褒め讃える。確かに、「京大俳句」などの新興俳句では、作者の多くは、戦争に応召された兵士ではなく、銃後にいる俳人が、ニュース映画や新聞・

雑誌の記事を見て戦争を詠んだ戦火想望俳句あり、そこに長谷川素逝という実力のある俳人が戦場で詠んだ前線俳句は、実体験であるだけに胸を打つものがあったのである。

次の「京大俳句」昭和十三年五月号では「戦争俳句論」として井上白文地・山口誓子・石橋辰之助の評論を載せる。

井上白文地の「戦争俳句の見通し」では、やはり、問題となる内地・銃後にいて前線俳句を作ることの問題にふれ、どちらにしても戦争俳句を作ることが今後必要だと述べる。山口誓子の「戦争無季俳句のこと」は、もちろん、実際に戦闘をする兵士が詠む前線俳句を純粹な戦争俳句だと評価する。ただ、誓子の場合、戦争俳句には詩感と国民感情のバランスが大切だとする(注5)。次の石橋辰之助の「戦争俳句覚書」では、白文地・誓子のように、戦場で詠む俳句や内地・銃後にあって前線俳句や銃後俳句にはこだわることなく、一般的に新興俳句が戦争俳句を詠まなければならぬと述べる。三人の共通な認識としては、戦争俳句はこれからどうなるかというテーマをかかげ、これからの戦場での体験から生み出された前線俳句に対して戦火想望俳句は太刀打ちできないという認識があるのは確かなよ

うだ。

ちなみに、山口誓子は、「京大俳句」昭和一三年五月号と同時期と思われるが、「素逝氏の句」と題した評を大阪朝日新聞（昭和一三年四月一五日付）に載せる。そこで、誓子は「前線俳句」について次のように述べる。

「前線俳句」の現状は——實感は豊かだが、技術を持つてゐない前線作家は、技術は持つてゐるが、實感に飢えてゐる銃後作家との争覇である。だが、いづれの場合も、その缺けてゐるものゝために、傍の眼にはかなり齒痒いところがある。

更に、俳句としての詩性を、その誓子なり、技術なりにおいて點検するといふことになると、問題は、ずつと面倒になつて来る。

たゞ戦争の實感があるだけではいけない。それが詩となる實感でなければいけないのである。またこれと反對に、詩情に溺れ過ぎたものは、はかない露営の夢となる危険がある。「前線俳句」といはず、すべてすぐれた俳句は、常に、精神・技術ともに備はるといふ一點に、ぴたりと位置を定めるものである。

このように、「前線俳句」について、実感と詩性・詩情というのは精神に集約されると考えられ、技術との葛藤について述べる。それらを満たし、しかも「現存出征してゐる作家、それも欠かさず後方へ作品を寄こしてゐる作家の中で、私の嘯目してゐる作家は長谷川素逝である。陸軍砲兵少尉長谷川直次郎氏である」と書く。

誓子は推挙する俳句として以下の四句を挙げ、それに感想を付けている。

ねむらねば眞夜の焚火をとりかこむ

我が馬を埋むと兵ら枯野掘る

夜の雷雨砲車に光りては消ゆる

寒夜くらし曉けのいくさの時を待つ

これらは、前線における「厳しい詩」であるとし、その精神はもちろん技術も進んでゐるから、危つかしい所は微塵もない。

「前線における『厳しい詩』と賛辞を送るが、この作家の作品といえども、「戦争そのものから二歩も三歩も退い

て詠つたもの」は「前線俳句」としては、採らないとも誓子は述べる。「たんぼ、やいま江南にいくさやむ」「目をつむりはるばる來ぬる枯野あり」の句は、前線俳句としては、採らないのである。読者としては、悲惨な戦場の描写の中にこれらの句があると、ほっとするものであるが、誓子は非情にも採らないのである。戦争俳句に対する「厳しい」誓子の考えがうかがえる。

おわりに

句集『砲車』としてまとめられる前の「ホトトギス」に掲載された長谷川素逝の前線俳句を見ることで、「ホトトギス」でどのように戦争俳句のなかの前線俳句が受け入れられてきたかを見た。また、山口誓子をはじめ新興俳句の俳人たちが言っていた、戦場で詠まれた前線俳句に期待することが大きかったその理由の一端が見えてきたのではないかと思われる。つまり、前線俳句を先に取り上げたのは「ホトトギス」であり、新興俳句ではなかったということである。

ところで、山口誓子についてふれたが、「山口誓子と戦争俳句」「山口誓子と無季俳句」など、まだまだ未開拓なテ-

マが考えられる。これらについては、稿を改めたい。

注

(1) この時代「支那事変」と呼び習わしていたので、本稿でも「支那事変」と言う。

(2) 山口誓子は、「戦争詩歌を語る」(昭和十三年二月二〇日 JOBK)において、戦争俳句の分類を試みている。それによると、「前線俳句」と「銃後俳句」に分けるが、「前線俳句」は実際に従軍した兵士が詠んだ俳句と明確であるが、「銃後俳句」は、戦争へは行かず、いわゆる銃後を守るといような、出征を見送る家族の俳句も含めているので、本稿では、後者の方の戦争には行かず、戦場を想像して詠んだ俳句を「戦火想像俳句」と呼ぶ。「戦火想像俳句」は、月刊誌「改造」の当時ベストセラーになった『麦と兵隊』(火野葦平)を俳句で読んだらどんな句ができるだろうかという企画により、日野草城が「俳句研究」昭和十三年九月号に載せた俳句に「戦火想像」という題を付けて発表したことに由来する。誓子の分類による「銃後俳句」という名称では範囲が広いので、本稿では戦地を想像して詠んだ俳句として「戦火想像俳句」とする。

(3) 昭和十一年に刊行された『砲車』には「皮ごろも着て大人の風貌を」の句が入っていない。他に掲載されなかった句があり、除かれた理由についての考察も必要などところであるが、そ

れは別の機会としたい。

(4) 紙面の関係で「ホトトギス」に投句された句をすべて挙げるのは控えるが、あまり巻頭ばかりでは、ひいきしているようにみられるのを避ける高濱虚子の俳誌経営の配慮が見られると考えるのは筆者の考えすぎであろうか。また、「ホトトギス」昭和一四年一月号には、「病院船」と題する一八ページにも及ぶ、病を得た長谷川素逝が病院船に乗って帰国するまでの随筆が載る。同じ号の虚子の「消息」欄には、『砲車』として句集が出版されることになっており、「洵に其句は今度の戦争が生んだ文藝品の優秀なるもの、一つであります」と絶賛する。

(5) 山口誓子は、「戦争と俳句」「俳句研究」昭和一二年一二月号)において、「もし新興無季俳句がこんどの戦争をとりあげ得なかつたら、それはついに神から見放されることだ」と述べている。これも重要な発言であり、突き詰めたテーマであるが、今後の課題としたい。